

第3章 学校現場での取組み

第1節 教科書以外の教材

教科書以外では、どのような教材が使われているのであろうか。知人のフランス人教師の協力を得て、5名の現役教師にアンケート調査を行った。いずれも「歴史・地理」を教えている先生で、うち4名が職業教育を中心とするリセで教鞭を取っており、残り1名が通常のリセで勤務している。

彼らに対する質問は、「貴方が、歴史もしくは地理の授業で『日本』のことを教える際、教科書のほかどのような資料、教材を使いますか」というものであったが、彼らの回答ではまず、日本の詳細な地形図を挙げるものが多く、次いでLe Monde等の新聞記事、あるいは L'Express、l'Expansion、le Nouvel Observateurといった雑誌の記事やテレビ番組から材料を拾うというものも多い。逆に個性的なところでは、複数の教科書を自分で再編集し独自の教材を作っているという教師も居たし、フランス語に翻訳されている日本の文学作品の一部を用いるという回答もあった。

しかし、5人全員がCNDP(Centre National de Documentation Pédagogique 全国教育資料センター)の既存の教材を利用していると答えた。CNDPは国民教育省の監督下にある公法人で、教育に関わる文書の印刷・発行を行うほか、様々な教材の編集及び販売を行っている。これらの文書や教材は、全国120箇所 に及ぶ CRDP(Centre Régionaux de Documentation Pédagogique)、CDDP (Centre Départementaux de Documentation Pédagogique) といった地方の資料センターでも入手可能である。

第1章で見たナショナル・カリキュラムも、印刷・発行はこのCNDPが行っている。

さて、CNDPの販売する各種教材のカatalogueを取り寄せてみたが、ビデオ教材で「広島」、「ヤルタ会談」に関するものがあるほかは、ずばり日本を取り上げているものはほとんどどない。従って、歴史にしても地理にしても、「第2次世界大戦」とか、「仏教」といった包括的なテーマで編集された教材の一部を利用するほかないのが実態である。「歴史・地理」に関する限り、日本を学ぶための教材は決して多くはなく、欧州各国に関する教材の多様性と比べ、かなり見劣りがするものであった。今回話を聞いた教師たちもその点が不満な様子で、最新の事情や統計数字を反映したビジュアルな教材が欲しいと言っていた。また、これら既製の教材への不満が、新聞や雑誌に素材を求める等の個々の教師の努力を促しているようである。

第2節 日本への研修旅行

フランスの学校教育では、ごく早い時期から研修旅行等で外国を訪問する機会が多いが、その大半はほかの欧州諸国に限られ、日本が行き先になることはほとんどない。パリ郊外のヴァル・ド・ワーズ県エルモン市にある「グスタフ・エッフェル職業リセ」（以下、単に「職業リセ」と記す）の関西方面への研修旅行は、その希な例に当たる。

この職業リセで日本が選ばれた理由にはいくつかある。まず、同校の「歴史・地理」教師の一人に日本への留学経験者がいたこと、同校ではカナダ等、遠隔地への研修旅行に実績があったことが第一にあげられる。ほかには、職業リセという性格上（熟練労働者の養成が、主な目的）、技術教育には大きな関心を寄せており、「技術社会日本」の評判が彼らの興味を引いていたことがある。また、ヴァル・ド・ワーズ県は大阪府と友好提携を行っており、行政サイドからも協力が期待できたことも理由の一つであった。

研修旅行そのものの目的は、次の3つに分けられた。すなわち、①異文化間交流、②広島訪問（平和学習）、③日本の技術文化の観察、である。筆者を含め、職業リセと大阪府の間で協議をした結果、①については、大阪府内の工業高校を2校訪問して交流事業を行うこと、また③については、大阪府下の企業を訪問することで同意をみた。さらに②についても、広島で平和資料館を見学するほか、被爆者との懇談の機会を求めることとなった。研修旅行の企画が筆者の元に持ち込まれてから、最終的な日程案が出来るまで約1年の歳月を必要としたが、その細かな内容は後節のとおりである。

さて、研修旅行の参加者であるが、当初の企画段階では生徒26名、教師4名の計30名が予定されていた。生徒は実施段階で3年生（※）となる生徒たちで、希望者の中から特にモチベーションの高い生徒が選ばれている。結果的には、男子生徒14名と女子生徒11名の計25名が参加するところとなった。男子生徒は主に電気器具や電気設備に関する学習をしており、一方女子生徒の大半は、コンピューター操作や会計、経営管理といった学習を中心に行っているものである。教師の側は、前述の日本留学経験者を含め5名が参加。さらに通訳ボランティアとして、日本人大学院生が1名随伴した。この参加者の内訳からもわかるように、今回の研修旅行は、生徒全員を対象としたものではなく、また、「歴史・地理」の教師のイニシアチブによったものの、特定の授業と絡めて実施されたものではない。あくまでも希望者だけを対象に、課外活動の一貫として企画されたものである。しかし、恵まれない経済環境、あるいは家庭環境にある生徒たちにも海外経験のチャンスを与えたい、との

意図があることも付記しておきたい。

（※）職業リセに2年間在籍して「職業教育免状」を取得した後の学生で、さらに職業バカロレアの取得を目指すものの1年目。およそ18歳である。

研修旅行の日程は39頁のとおりとなった。

日本での日程の手配は、基本的に宿泊先も含め大阪府（国際室と教育委員会）及び筆者が行ったものである。ただし、週末・祝日の日程（京都・奈良への小旅行等）は職業リセの一行が、我々の助言に従い独自に企画した。

来日の当初がゴールデンウィークの後半に当たったこともあって、最初の三日間は「日本文化との接触」が要点となった。奈良で東大寺、興福寺、春日大社といった名刹を見学した後、京都では八坂神社や清水寺を参拝し、また祇園近辺の繁華街の雰囲気も楽しんだ。大阪では大阪城を訪ねたほか、たまたま府の主催する文化事業を通じ「文楽」を鑑賞する機会も得た。日本を始めアジアの国々を訪問した機会をほとんど持たない生徒たちには、エキゾチックな異文化への導入となったようである。日程を調整する立場から言えば、京都、奈良へのアクセスが容易な大阪の地の利を、十二分に活かすことが出来たとも言えよう。

続く7日～8日の週末は、広島への1泊2日の旅行となった。まず、平和資料館と平和祈念館を入念に見学した後、ボランティアの被爆者に平和公園内の様々な慰霊碑を案内していただいた。この碑めぐりを含め、被爆者と生徒との面談は3時間近くに及んだ。「被爆の生き証人」に一目なりとも生徒を会わせたい、との職業リセの先生のたつての希望が実現したものである。多少の事前学習をしていたとはいえ、被爆資料や体験談に対する生徒の反応はショックに近かったようで、むしろ時をおいた後の彼らの感想に職業リセでは関心を寄せていた（当レポートの執筆時には生徒の感想はまとまっていない）。翌日は、午前中から宮島に渡り、厳島神社に参詣。日本三景のひとつを楽しんでいる。また、この旅行では移動に新幹線を用いたが、これも生徒たちには1つの経験となったはずである。

翌週、ゴールデン・ウィークが明けての9日、10日を松下電器産業本社とクボタ堺製造所の訪問にあてた。この2社が選ばれたのは、在阪企業であるほかに、松下の場合は世界的にも有名な日本の家電メーカーのひとつであり、'パナソニック'のブランド名が生徒の間でもよく知られていたこと、クボタの場合は職業リセのあるヴァル・ド・ワーズ県にそのフランス法人が存在するという縁による。さて、松下では、本社に隣接する「松下電器技術館」を見た後、門真北の工場を見学した。前者では先端技術の作り出す未来生活のシュミレーションを堪能し、また後者では日本の高度に自動化された生産ラインを見聞できたようである。クボタでは農機具

の生産ラインを見学したほかに、一部研修施設を覗いたり、管理職との意見交換を行うなど、日本企業の様々な面を見学した。しかし、漫然と日本企業を見て歩いたというのではなく、学習のポイントとして以下の点が強調されている。すなわち、①日本企業の研究開発部門と製造部門の高度な連携、②企業内の各部署の統合、③高い生産性、④労働力のチーム中心の活用と総合的な技能の育成、⑤部品供給者との連携などである。教科書だけで学習するのと違い、生産現場で当事者の意見を聞くのは、生徒たちにも新鮮なイメージを残したものである。

11日は「自由行動」の日となった。この日、教師の引率は一切無く、生徒はそれぞれ地下鉄の切符を買い求め、梅田方面へ買物に出かけたようである。取り分けハプニングもなく、生徒諸君は自由を満喫できたとのことであった。

研修旅行の締め括りは、工業高校への訪問となった。制度的には同一のものではないにしろ、教育内容や生徒をとりまく環境など、フランスの職業リセと日本の工業高校は事実上カウンターパートであるとの認識から実施されたものである。ただし、今回訪問の対象となった2校は、同じ工業高校とはいっても多少性格を異にしている。淀川工業高校は電子機械科と情報技術科の2学科で構成され、電子工学や情報処理が学習の中心となる。一方、西野田工業高校は機械科、電気科、建築科、土木科のほか工業デザイン科を擁し、建築工事や土木工事に必要な設計・施工に関する学習や産業デザイン、インテリアの学習も行っている。

どちらも昼食を挟んでまる1日の訪問となったが、日本人生徒の授業に参加し、協同で課題をこなすなど、言葉の壁を越えて積極的な交流を行った。具体的には、太陽に反応するオルゴールの作製、数値制御機械の操作プログラム（淀川工業高校）、書道、コンピューター利用の設計実習（西野田工業高校）などに取り組んでいる。日本側の設備の充実、フランス側の予想を超えていたようで、引率の教師に強い印象を残したとのことであった。

また、フランス側の関心を特に引いたのは、日本の学校での課外活動の多様さと生徒の熱心な活動振りで、ブラス・バンドやコーラスといった音楽系のクラブ、応援団、機械研究、アニメーションなどのクラブ名が、彼らの報告書に記載されている。来日前は、日本の工業高校での就職対策が、フランス側、特に教員の関心を集めていたが、この点フランス側の明確な理解が得られたかどうか疑問である。これには、先輩・後輩のコネクション、4月を基準とした新卒の一斉採用など、フランス側が理解しにくい面が多分にあるためと思われる。しかし、急速な技術革新や社会の変化に、なお教育を整合させて行こうという日本の工業高校の苦悩は、フランス側の問題意識と強く共鳴する部分があったことが伺える。

ついでに、滞在中の宿泊・食事について付記しておく。大半の宿泊先がユースホ

ステルになったのは、予算上の事由のためであるが、細かな利用規則にもかかわらず、概ね好評であった。しかも広島ユースホステルは、本来外国青年を積極的に受け入れることを基本方針として運用されており、極めて協力的に対応していただいた。ともすれば、外国人の受け入れに消極的な公共宿泊施設もあるだけに、このような施設の存在は、国際交流に関わるものとしても心強い。

生徒の一部にイスラム教徒がいたことを、食事の手配をするに当たり、留意しなかったのは反省点である。また、ユースホステルの食事は、生徒諸君には量の面で不満であったようだ。さらに、イスラム教徒の生徒には（特に女生徒には）、裸のつきあいを半ば強要されるホステルの「大浴場」が難題であったようである。

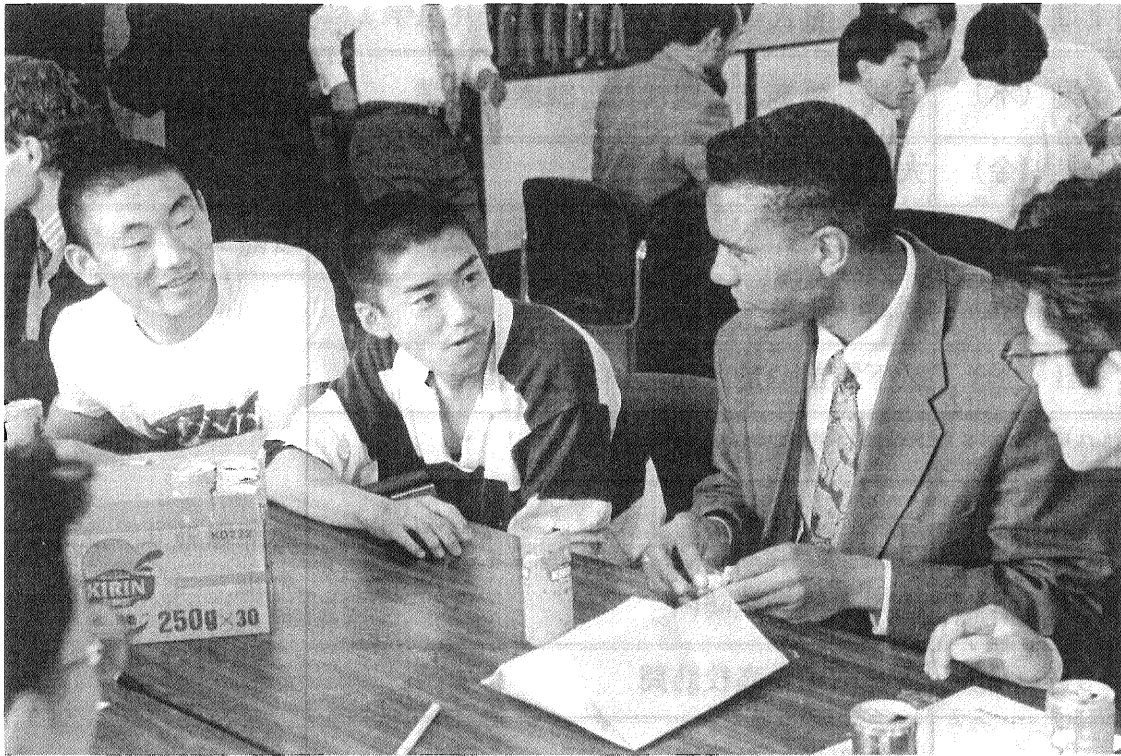
今回の研修旅行については、写真展の開催、ビデオ・プログラムの制作と生徒の感想の取りまとめをもって、総括とされるはずであるが、現時点ではどれも完成していない。しかし、帰国後の聞き取り、また内々に関係者に配布された報告書からみる限り、満足のいく成果を残したようである。何よりも本物を見せることの意義を示すのもであろう。国民教育省等の関係者も、今回の研修旅行が成功した事実そのものに関心を寄せており、ひとつの先例となり得たことを、当事者の一人として自負するところである。

職業リセの研修旅行日程

月 日	日 程	宿 舎
5月3日（火）	大阪空港 着（成田経由）	大阪コクサイホテル
5月4日（水）	奈良 東大寺、興福寺、春日大社見学	
5月5日（木）	京都 祇園、八坂神社、清水寺見学	服部緑地ユースホステル
5月6日（金）	大阪城見学、文楽鑑賞	
5月7日（土）	広島 平和公園訪問、被爆者との懇談	広島ユースホステル
5月8日（日）	宮島、午後 帰阪	服部緑地ユースホステル
5月9日（月）	松下電器産業本社（守口市）視察	
5月10日（火）	クボタ堺製造所視察	
5月11日（水）	自由行動（大半の生徒は大阪で買物）	
5月12日（木）	淀川工業高校訪問	
5月13日（金）	西野田工業高校訪問	
5月14日（土）	大阪空港 発 パリ 着（成田経由）	

最後に、今回の研修旅行の資金的な面に触れておきたい。当旅行は、生徒及びその父兄に金銭的な負担を一切求めずに実施された。また、大阪府もとりわけ資金的な面で助成をしたわけではない。職業リセ側の当初予算では、参加者1名あたり日本円にして 約2百万円の経費を見込んでいたが、その半分は『ベルリン日独センター』の「日本行き研修旅行への支援事業（Support Program for Study Trips to Japan）」によって賄われることとなった。また残り半分は、フランス側の関係市町村や教育関係団体、日仏の民間企業等の助成によっている。フランスを始め欧州の青年が、直接日本を知る機会を限られるのは、日本への旅行が高くつくことに尽きる。しかし、前記のような支援事業が公民を問わず充実してきており、今度の職業リセのような例がほかにも出てくる可能性は高い。また、日本の自治体関係者も国際交流事業については、柔軟な発想で対応することが肝要であろう。

〈写真 5〉大阪の工業高校を訪問した職業リセの生徒。



第4章 結びに代えて

フランスの教科書等の中で日本がどのように教えられているか、その現状と問題点については第3章までに書いたとおりである。フランスのナショナル・カリキュラム、各教科書の記述ともに大きな誤りはなく、一昔前に聞いたような無知や誤解に基づいた記述や、首を傾げるようなものは無かった。しかし、フランスの学校教育の中で、日本が十分な存在感を得ているかという点と疑わしい。ひとつは、教科書そのほかで取り上げられる日本というものが、相対的にまだまだ小さなものであること。もうひとつは、教師にしろ、また生徒にしろ、日本を直接知る人が皆無に近いということである。

そこでこの章では、今回のレポートをまとめる中で思いついた事柄を披露させていただきたい。といっても、具体的な施策とするには随分大雑把なものであるが、フランスでの日本理解を進めるための、ひとつのアイデアと考えていただければ幸いである。

1 ジャパニーズ・キット

まず、ある歴史・地理科の教師から実際あった提案なのだが、日本を紹介する小物や書物を詰め合わせた「ジャパニーズ・キット」のようなものを作ってはどうか。ただし、これは特に目新しい試みではなく、その名称はともかくとして、米国やイギリスでの先例がある。イギリスの例で言うと、初等学校を対象にした日本紹介の実演のための「資材箱」で、浴衣、下駄、風呂敷、扇子、箸、日本の新聞などといった30以上の資材が詰められている（CLAIR REPORT 第65号 『英国の学校における日本教育』、30頁）。

しかしフランスの場合は、前述のように日本を学習する生徒の年齢が高いため、歴史や地理の授業のための教材・資料セットのようなものを考えられないだろうか。具体的には、原爆被災者の体験集、サラリーマンの生活を描いた漫画、フランス企業の日本での雑誌広告、テレビ番組のビデオ、日本経済の断面を写し取ったスライド集などが考えられよう。さらに英国の例のように、日本の文化や日常生活を伝える小物が入っていても良い。無論、それぞれの資料には仏語訳、もしくは仏語の解説が添付されていることが望ましく、ビデオの映像方式にも留意しなければならない（フランスのビデオの映像方式は日本と異なる）。

教科書以外に多様な教材を求められるといっても、やはりフランス国内では限界

がある（第3章第1節）。例えば、フランスのマスコミでの日本の扱いはまだまだ小さく、一面的に過ぎるとの指摘もある。フランスで紹介されている日本映画も、邦画全体から言えばかなり片寄ったものである。また、全く同じ写真が複数の教科書会社で使用されるなど、一般に流布している日本紹介の素材そのものが、多様性を欠いていることは否めない。そのような教材の不足を補う意味で、上記のようなキットに意義が生ずるのである。上記の教師の狙いもその辺りにあり、彼自身、日本に関する資料を集める上で、苦心することが多いとこぼしていた。

しかし、フランス全国のリセに教材集を進呈するとなると、経費は莫大なものとなる。簡単に実施できる事業ではない。では、地方自治体が交流事業の一環として、姉妹都市交流先に送るといえるのはどうであろう。複数の学校で共用するようにしてもらえば、10～20セットで交流先の需要はある程度賄えるのではないだろうか。各自治体には広報用に取り集めたスライド（ポジ）等大量にあるはずで、素材にも不足はないし、また、自らの地域を紹介する資料等を加えれば、姉妹交流そのものの良い広報となろう。

2 歴史・地理教員研修旅行の受入れ

生徒の日本理解を促すには、研修旅行等で日本を直接見てもらうのが、もっとも手っ取り早い。しかし、前章でも書いた通り、日本への研修旅行を実施している学校はごく例外であり、今後増える可能性があるといっても、大幅な増加は期待できない。

それでは、歴史や地理の先生に研修旅行をしてもらうというのはどうであろうか。生徒を直接連れて来るわけではないが、教室で何人もの生徒と接触する先生に、日本を知ってもらうことの意義は大きいと考える。間接的な青少年交流と思えばよい。予算の限度と各先生の授業の与え得る影響を考えれば、かえって費用対効果が大きいとも言える。

具体的には、3章の例のように10日間程度の研修旅行を交流のある日仏の地方公共団体が企画し、フランス側で参加教員を選定して派遣するということになるだろうか。企業の本社の大半は東京にあると行っても、その生産活動は全国で行われており、農業や漁業も視野に入れば、日本全国どこの府県でも、フランス側の見たいものは沢山あるはずである。文化や自然を考えれば、地方がフランスの先生たちに発信できるものは数限りない。

実施時期や招致人数、費用負担の方法など細かなことは、実施主体によって変わってくるであろうが、なるべくなら日本の学校日に授業を参観してもらい、日本の教育現場を見てもらうのも面白いかもしれない。

いずれにしても、教員・生徒ともに日本に行ったこともなく、日本の知人・友人すらおらず、教室にゲストとして日本人を迎えたこともないというのは、我々にとっても大変不幸なことである。もちろん、フランスのナショナル・カリキュラムや教科書の記述が不十分であると批判するつもりはない。しかし、日本について教科書以外の多様な情報を与えること、あるいは1人でも直接日本を知る人を増やすことが、我々の利益に叶うならば、地方自治体に出来ることも多いような気がするのである。

〈写真 6〉彼らの許へ「日本」を届けられるか。



《参考文献》

- 1 Ministère de l'Éducation Nationale, "Histoire, Géographie, Instruction Civique; classes de seconde, première et terminale", 1993 (1994 Réimpression).
- 2 Ministère de l'Éducation Nationale, "Chinois Japonais; classes de seconde, première et terminale", 1988.
- 3 別技篤彦 著、『世界の教科書は日本をどう教えているか』、1992年、白水社。
- 4 菅野昭正、木村尚三郎、高階秀爾、荻昌弘 編、『読む事典フランス』、1990年、三省堂。
- 5 新倉俊一ほか 編、『事典 現代のフランス』、1988年（第三版）、大修館書店。
- 6 (財)自治体国際化協会 編「フランスにおける日本語教育の現状と課題」(クレア・レポート第63号)、1993年。
- 7 (財)自治体国際化協会 編「英国の学校における日本教育—英国の学校教育において日本はどう教えられているか—」(クレア・レポート第65号)、1993年。

(教科書)

- 1 Robert Frank (direc.), "Histoire 1re A/B/S", 1988, Belin.
- 2 Robert Frank (direc.), "Histoire Terminales A/B/C/D", 1989, Belin.
- 3 François Pommerolle (direc.), "Histoire 1re G", 1988, Belin.
- 4 Robert Frank (direc.), "Histoire Terminale G", 1990, Belin.
- 5 Geneviève Dermenjian et les autres, "Histoire Première", 1988, Bordas.
- 6 Elisabeth Brisson, Geneviève Dermenjian et les autres, "Histoire Terminales", 1989, Bordas.
- 7 Jacques Aldebert et les autres, "Histoire Première 1880-1945 naissance du monde contemporain", 1988, Delagrave.
- 8 Antoinette Bouillon et Serge Corre, "Histoire Première G", 1989, Dunod.

- 9 Nicole Bernard et les autres, "Histoire Terminale G", 1992, Dunod.
- 1 0 Régis Bénichi et les autres, "Histoire de 1980 à 1945 Classe de Première A,B,S", 1988, Hachette.
- 1 1 Régis Bénichi et les autres, "Histoire du Temps Présent Terminale G", 1990, Hachette.
- 1 2 Serge Berstein et Pierre Milza (direc.), "Histoire Classe de Première", 1988, Hatier.
- 1 3 Serge Berstein et Pierre Milza (direc.), "Histoire Classe Terminale", 1989, Hatier.
- 1 4 Yves Denis et les autres, "Histoire classe de 1 re", 1988, Istra.
- 1 5 Jacques Marseille (direc.), "Histoire 1 re", 1988, Nathan.
- 1 6 Jacques Marseille (direc.), "Histoire Terminales", 1991, Nathan.
- 1 7 Marcel Baleste (direc.), "Géographie Classes Terminales le monde d'aujourd'hui", 1989, Armand colin.
- 1 8 Rémy Knafou (direc.), "Géographie Term. ABCD le nouveau système-monde", 1992, Belin.
- 1 9 Roland Froment, Robert Kienast et Bernard Padeloup (direc.), "Géographie le monde actuel Terminales", 1991, Delagrave.
- 2 0 Michel Crespeau et les autres, "Géographie du temps présent Terminale G", 1989, Hachette.
- 2 1 Christian Barret et Jean Brignon (direc.), "Géographie classe de Terminale", 1989, Hatier.
- 2 2 Jean-Robert Pitte (direc.), "Géographie Terminales", 1991, Nathan.
- 2 3 Janine Brémond et les autres, "Sciences Économiques et Sociales Terminale", 1988, Hatier.

2 4 Michel Bernard et les autres, "Économie et Société françaises des années 90 Classe de 1re B", 1988, Nathan.

2 5 Michel Bernard et les autres, "La nouvelle donne mondiale des années 90 Classe de Terminale B", 1990.